



10周年記念式典会場，壇上中央は茅総長

去る6月1日に本所の創立10周年記念式典が行われた。午前11時から所内講堂で福田所長の挨拶に始まり、来賓のうちから茅東京大学総長、財団法人生産技術研究奨励会理事長中原延平氏、前所長の代表瀬藤象二東京大学名誉教授の各氏の祝辞があり、記念行事委員長高橋武雄教授の閉会の辞をもって正午、本所の将来を祝福する雰囲気の中に式典を終えた。ここに、上記の来賓祝辞要旨を収録し、あわせて所長の挨拶と記念行事の模様とを本文記事に載せた次第である。

祝 辞

(要 旨)

東京大学総長 茅 誠 司

私が第1に申し上げたいことは、この生産技術研究所に二つの思い出があることです。その一つは昭和23年のことであつたと思う。当時の森戸文部大臣から学術研究会議に対し、科学教育局長を推薦してほしいと依頼があつた。この依頼に対し、当時の学術研究会議の副会長であつた瀬藤先生によって私が推薦され文部省に行くことになり、9カ月ほど勤務した。その間に問題になつたのは、学術会議を作ること、また学術会議と政府との間が円滑にゆくために科学技術行政協議会を作ることであつた。科学技術行政協議会の局長の適任者に関し仁科先生と相談したところ、兼重先生のほかに適任者はあるまいということになり、仁科先生と同道で瀬藤先生のもとへ相談にうかがつたところ、瀬藤先生に(研究所にとって大切な人であるので)そんなことは問題にならぬとにべもなくことわられた。これが第一の思い出である。

第2は、第二工学部が生産技術研究所となるとき、これを担当していたのは文部省科学教育局であり、いろいろな問題があつた。航空研究所が理工学研究所となり、第二工学部が生産技術研究所となる、この両者間の相違が理解できなかった。生産技術研究所の目標は言うは易く、行ふは難し、ではないかということであつた。つまり当時の日本では基礎研究が相当進んでおつたにせよそれを生産に反映させるには、大学にはその方面の人がおらず、生産面の協力で初めてできるものではないかというような批評があつた。その時、瀬藤先生が千葉で議論しようというので招かれた席上卒直な意見を述べたが、先ほど所長からお話があつたように私は失業救済とはいわなかつたと思う。生産技術研究所の構想は、工学全般にわたる広い協力によって研究成果を生産の場まで持つてゆくことであると理解した。

以上のような意味で、この10年間非常な興味をもって生産技術研究所の発展をながめてきた。今日生産技術研究所は、産業界との提携のもとに逐次その成果をあげ、初期の目的が達せられたことを知り感嘆している。

最近の科学は、基礎と応用の区分がなくなつてきたと思う。私はマグネットの専門家であるが、その発明を振り返ってみると、本多先生がKSマグネットを、三島先生がMKマグネットを、加藤、武井両先生がOPマグネットを発明された。理論からではなく、発明した後で優秀な磁石ができたことがわかつた。その後ソ連のフレンケル・ドルフマンが1930年に鉄の超微細粒子を固めると強力なマグネットができるという理論を打ち出した。当時境界エネルギーの計算が間違つていたので信用されなかつたが、後に1946年、アメリカ、フランス、イギリス等の理論物理学者によってその理論が改良され、それに従つて実験的にファインパウダー・マグネットが完成された。理論物理の研究が先行して応用物理、工学、生産へという関係が密接になつてきた。これからは基礎的方面から積み上げたピラミッド形でなければ産業は成立しない。この意味において生産技術研究所の構想と一致しており、研究者の努力と産業界からの援助とにより今日にいたつたものと私は考える。

10周年を迎えるに当り産業界のご協力に深く感謝すると共に、今日まで失業救済の研究所であるという非難を甘んじて受けながら十年間を努力されてきたことに対し敬意を表したい。